



第3回 3月24日(火)掲載

◆災害級の暑さの時代 40℃超えの呼び名募集

「現在、気象庁では、最高気温が 25℃以上の日を「夏日」、30℃以上の日を「真夏日」、35℃以上の日を「猛暑日」と定め、予報用語として天気予報等で使用しています。3 年連続で夏に顕著な高温を記録したほか、40℃を超える気温が毎年のように観測される状況をうけ、今般、最高気温が 40℃以上の日について新たに名称を定めることにしました」

気象庁は 2 月 27 日から、最高気温が 40℃以上の日の名称を決めるためのアンケートを始めた。期限は 3 月 29 日まで。猛暑日が制定されたのが 2007(平成 19)年なので、19 年ぶりに 1 ランク上の高温の命名に乗り出したわけだ。最高気温 40℃超えが当たり前になる時代が、もう目の前に迫っていることを感じさせる動きだ。

昨今、最高気温 40℃超えの観測地点は急増している。特に昨年(2025 年)の夏は、8 月 5 日に群馬県伊勢崎市で歴代 1 位となる 41.8℃を観測したのをはじめ、2 位となる 41.4℃を埼玉県鳩山町と静岡市で、4位となる 41.2℃を兵庫県丹波市と群馬県桐生市で観測するなど 40℃超えの観測地点数は 30 地点を数え、過去最多を記録した。最高気温値、観測地点数とも大幅な更新となった。

これまで日本での 40℃超えは 48 地点、延べ 108 回記録されている。山梨でも甲府で 2004(平成 16)年 7 月 21 日に 40.4℃、2013(平成 25)年 8 月 10 日に 40.7℃、同 11 日に 40.6℃、2018(平成 30)年 7 月 23 日に 40.3℃を観測、勝沼でも 2013(平成 25)年 8 月 10 日に 40.5℃、2022(令和 4)年 7 月 1 日に 40.2℃を観測、2 地点で合計 6 回の記録がある。



その背景には、気温そのものが「底上げ」している温暖化がある。気象庁データから日本の年平均気温の経年変化を見ると、着実に右肩上がりしている。特に令和になってから拍車がかかっている。去年までのランキングで最も高いのが 2024 年で、以下 2023 年、2025 年、2020 年、2019 年、2021 年、2022 年と続く。令和が始まったのが 2019 年 5 月 1 日なので、この順番を元号で記述すると①令和 6 年②令和 5 年③令和 7 年④令和 2 年⑤令和元年⑥令和 3 年⑦令和 4 年ー。つまり、令和の時代は、年平均気温のトップ 7 をすべて独占している。特に令和 5 年に年平均気温がそれまでと比較して大幅にジャンプアップしてからは、昨年までの 3 年間その状態が続き、新しい高温ステージに入ったかのような猛烈な暑さが続いている。令和 8 年の今年もその継続の懸念は大きい。国連のグテーレス事務総長の言を借りれば、令和時代の日本は温暖化を超えて、沸騰化の時代に入っているかのようである。



←甲府で40.3度を観測した2018年7月23日。猛烈な暑さの中、小瀬スポーツ公園では監視員が水を浴びながらプール利用者を見守っていた(写真・山梨日日新聞提供)

こうした夏の猛烈な暑さが、もはや災害として「災害級の暑さ」という言葉が使われ始めたのが 2018(平成 30)年のこと。その年の年末、ユーキャン新語・流行語大賞でトップ 10 にも入った。平成の最後に生まれた「災害級の暑さ」という新語は、暑さに拍車がかかる令和において、その度合いはどんどん増している。そしてついに、猛暑日を超える新名称の制定となった。

40℃を超える日は、命にかかわる災害のような日。そうした意識につながる呼び名が期待される。気象庁がアンケートで挙げた候補名は炎暑(えんしよ)日、劇暑(げきしよ)日、激暑(げきしよ)日、厳暑(げんしよ)日、酷暑(こくしよ)日、極暑(ごくしよ)日、甚暑(じんしよ)日、盛暑(せいしよ)日、大暑(たいしよ)日、熱暑(ねっしよ)日、繁暑(はんしよ)日、烈暑(れっしよ)日、超猛暑(ちょうもうしよ)日。その他で自由記述もある。アンケート結果を踏まえ、有識者や日本語の専門家へのヒアリングを経て 5 月までに新名称を決め、今夏から予報用語として使い始めるという。締め切りまで残りわずかだが、あなたなら何と名付ける…？

(気象予報士・保坂悟＝甲府市在住)